とやま、祭り彩時季【二】

神は巡る　獅子舞百珍　写真・文／木原盛夫

とやま、祭り彩時季【二】

神は巡る　獅子舞百珍　写真・文／木原盛夫

CONTENTS

○神は巡る・・・・・・・・・・・・・・・4P
【コラム】金剛峯寺に奉納された・・・27P
唐櫃
○獅子舞王国・富山の獅子舞百珍
・多種多彩な富山の獅子舞・・・・・30P
・露払いをする行道獅子・・・・・・47P
・熊獅子・・・・・・・・・・・・・・65P
・シシトリ・・・・・・・・・・・・・74P
・有磯正八幡宮の獅子頭総覧・・・・96P
・火渡りと獅子舞と不動明王信仰・・99P
○道案内の神　猿田彦（サルタヒコ）・107P
○富山の芸能にところどころ現われる・122P
願念坊
【コラム】皇大神宮奉斎所のご神木・・142P

◯神は巡る

２０１７年の１０月、宇奈月町浦山にある鶏野神社の秋季大祭を撮影に行った。土砂降りの雨の中、天狗の面をつけたナガ（猿田彦だろうか）と呼ばれる先導役と露払いの行道獅子を先頭に、幟旗を立てたリヤカーを合羽を着た子供たちが引いて歩く。その後ろを大きなビニールを被せたお神輿がゆっくりと進む。

浦山は農村地で駅前の家が建ち並ぶ通りを外れると、田んぼと田んぼの中を通る農道になる。家もなく人影もない道を、それでもご神体を乗せたお神輿の行列は村の安寧を願って静かに進んで行く。その光景は、何だかとても神々しく美しかった。

５P上：雨の中、人影もない農道を静かに進む鶏野神社の神輿行列。
５P下：布尻・町長のお鍬さま祭り。無病息災を願って、ご神体を安置した神輿の下を潜る。

下タ北部地区（旧大沢野）にある布尻と隣接する町長では、ご神体である木製の小さな鍬を一年毎にそれぞれの神社に移す伝統行事「お鍬さま祭り」を毎年５月１９日に行っている。その際に使われるのは小さな社殿に棒を２本通しただけの簡素なお神輿で、小さな社殿の前後を二人で担いで進む。２０１６年に見に行った時は、町長の住民が布尻にある布尻神社まで神輿を担いでご神体を迎えに行った。布尻神社でご神体をお神輿に移すと、町長にある町長神社へ戻るが、途中にある家々から人が出てきてご神体を安置したお神輿の下を潜る。神輿の下を潜ることで一年間無病息災で過ごせるという。来年布尻の住民が迎えに来るまで、ご神体は町長神社に安置される。

神社の神霊が、町内や御旅所へ渡御する際に使われるのがお神輿だ。嘗ては肩に担ぎ上げて移動していたが、現在は祭りに参加出来る人が減ったこともあり、台車に乗せて運んだり、専用の自動車を造って荷台に乗せている神社もある。

７Ｐ：福野曳山祭りで知られる福野神明社の春季例大祭では、専用の車に搭載されたお神輿が町を巡行する。

町内神輿なら山王さんで知られる富山市の日枝神社の春季例大祭や、魚津八幡宮の献灯神輿祭りの町内神輿が肩に担がれているが、大きな宮神輿をずっと担いで練り歩く祭りは、今では福光宇佐八幡宮の春季例大祭、井波のよいやさ祭、芦峅寺の雄山神社の夏季例大祭など限られるのではないだろうか。

沖縄で参加した民俗学のフィールドワークで「祭りは生き物」と博物館の館長さんが述べていらしたが、確かに祭りは時代の移り変わりを経て変化していく。

9P上：富山市の日枝神社の山王祭に登場する町内神輿。昔てははだか神輿もあったが、近年は出ないようだ。
9P下：魚津八幡宮の献灯みこし祭りに担がれる町内神輿。神輿の周囲にボンボリが飾り付けられている。町内を巡行した後、一基ずつ拝殿の前でお祓いを受け、スロープを駆け上がって拝殿の中へ突進し荒々しく神輿を揺さぶる。

１０P：福光宇佐八幡宮の春季例大祭。１２時間ほどかけて町内を練り歩く。

１１P上：井波八幡宮の春季例大祭。３基の大神輿と３基の子供神輿が出る。

１１P下：芦峅寺にある雄山神社の夏季例大祭は２日間かけて行われ、２基のお神輿が出る。

神霊を運ぶ祭具は神輿だけではない。１０月１日の放生津八幡宮の秋季例大祭で、新湊の曳山祭りが行われるが、それに先立ち前日の９月３０日に放生津八幡宮の境内で海上から神霊を迎える霊迎式（たまむかえしき）が行われる。篝火を焚いて迎えた神霊は御船代（みふなしろ）という舟の型の輿に乗せられ、臨時の祭壇である築山まで運ばれる。伊勢神宮の式年大祭で、ご神体を新しい正殿に遷宮する際に用いられるのも御船代だ。

４月２３日に催される二上射水神社の春季例大祭でも、社殿の前から神霊を移した３基の御船代が境内に設えられた築山の前まで神幸する。

１３P上：新湊曳山祭り前日の夕方、放生津八幡宮では霊迎式が行われる。境内に篝火を焚き、海上から祖神を迎えて御船代に降ろし臨時の祭壇である築山へと運ばれる。

１３P下：二上射水神社の春季例大祭で行われる築山行事では、社殿から築山までご神体を乗せた三基の御船代が渡御する。

７月１９日に行われる富山市四方のえびす祭りでは、航海安全と豊漁を願って神職が漁船に乗って東西２ヶ所の漁場で祈願する。その際、恵比須神社のご神体を御船代に移して漁船に運び入れる。

４月下旬に行われる入善町芦崎のえびす祭りや、８月の入善町吉原の恵比須祭りでは屋形船に小さな社殿を乗せた輿に、ご神体を移して町内を巡行する。その際、ところどころで屋形船を前後左右に揺らす。これはお神輿を荒っぽく揺らすことで神霊に霊威を高めてもらうのと同じ発想だろう。

１５P：富山市四方のえびす祭り。ご神体を入れた御船代を漁船に積み込み、東西２ヶ所の漁場まで運んで航海安全と豊漁の祈願が行われる。

１６P上：芦崎えびす祭りの名で知られる入善町芦崎地区にある諏訪神社の春祭りには、小さな社を乗せた屋形船が町内を練り歩く。

１６P下：入善町吉原の恵比須祭りでは、帆を揚げた船にご神体を乗せて漁業関係の会社や公民館といった御旅所をまわる。

高岡御車山祭の宵祭りの夕方、二番町の神迎えが行われる。関野神社から二番町の山宿までご神体が運ばれるが、この時に使われるのが唐櫃（からひつ）と呼ばれる祭具だ。脚の付いた箱で、棒を通して二人で担ぐ。

千保川の灯籠流しが行われる８月１６日、中島町の公民館の中に水天宮の祭壇が設けられ、有磯正八幡宮に預けられたご神体が運び込まれ、祭典が営まれる。この時に使われるのも唐櫃だ。

山町筋にある通町では毎年８月１９日、２０日に夏祭りが行われる。嘗て通町にあった産霊社（むすびのやしろ）のご神体が現在、関野神社に預けられており、そのご神体が御旅所となる通町御車山交流館に里帰りされる。その時に使われるのも唐櫃だ。

１８P：高岡御車山祭の宵祭り。関野神社から二番町の山宿へ、曳山に乗せるご神体が唐櫃に入れて運ばれる。

１９P上：千保川の灯籠流しが行われる日、川沿いにある中島町公民館の中に水天宮の臨時の祭壇が設けられ、有磯正八幡宮に預けられているご神体が運ばれ祭典が行われる。写真は祭典が終わり、ご神体が唐櫃に入れられて有磯正八幡宮へ還御されるところ。

１９P下：山町筋にある通町の布袋祭。８月１９日、２０日の２日間、関野神社に預けられているご神体が町内に設けられた祭宿に里帰りされる。その際、唐櫃に入れられたご神体が町内の隅々まで巡行される。

１９日の夕方、関野神社へ迎えに行き、２０日の夕方にお帰りになる。その際、ご神体を納めた唐櫃が町内の隅々まで巡行する。この夏祭りは明治時代初期まで産霊社祭と呼ばれていたが、その後、通町御車山本座に飾られている布袋和尚の人形に因んで布袋祭となった。

他の山町筋の各町でも関野神社に預けてある守護神を迎えに行き、町内に設けた祭宿にお泊まりいただく夏祭りは行われていたが、近年は少子高齢化もあり神事が簡略化されたり、夏祭り自体が廃止になっているそうで、その中で比較的古くからのスタイルを継承しているのが、通町だと言われている。

鉄砲町・白銀後町の天神祭りが８月の第３日曜日に開催される。鉄砲町も白銀後町も旧町名で、現在は鉄砲町の一部と白銀後町の一部は末広町、残りは白金町になっている。

ご神体は天神様の掛け軸で、嘗ては唐櫃に入れて町内を巡行したが、今は小さな社に移し専用のリヤカーのような台車に乗せ、子供たちが引いてまわる。

２１Ｐ：鉄砲町・白銀後町の天神祭り。昔は夜にご神体（掛け軸）を唐櫃に入れて町内を巡行していたが、現在はご神体を小さな社に安置し、リヤカー風の台車に乗せて子供たちが引いてまわる。

T02-013

１１月の第３土曜日、漁師町の放生津（新湊）では潤立（またて）と呼ばれる漁法ごとに作られた漁師の組合の間で、ご神体のえびす絵像が頭屋から頭屋へと渡される伝統行事「潤建のえびす様渡し」が行われる。一年間お預かりした頭屋の家へ、次にお預かりする潤建の若い衆が迎えに行き、一年間お預かりする頭屋へ運ぶ。えびす絵像は厨子に入っており、その大きな厨子を若い衆が背中に担ぎ、落とさないように太い紐で括り付ける。

すっかり暗くなった夜道を祭主である西宮神社の宮司と共に、正装し提灯を持った漁師達に囲まれてご神体を納めた厨子が港町を巡る光景は、とても厳かだった。

２２－２３P：放生津の漁師の間で伝わる、潤建のえびす様渡し。これから一年間ご神体を預かる頭屋の若い衆が、大きな厨子に安置されたご神体のえびす絵像を背中に括り付けて運ぶ。

祭具を使わず人の手で神幸する祭礼がある。５月４日に行われ、やんさんま祭りの名で知られる、射水市にある加茂神社の加茂祭だ。加茂神社の祭神は玉依姫命、加茂建角身命、加茂別雷命だが、祭典では３体のご神体が社殿から出て境内の御旅所まで神幸される。ご神体は棒に紙垂がフサフサに付いたもので、息がかからぬように口にマスクをした氏子が手に抱えて歩く。真っ白な紙垂を身に纏ったご神体が、３体並んで境内を進む姿は清楚で美しかった。

井波よいやさ祭りの名で知られる井波八幡宮の春季例大祭でも、５月２日の宵祭の夕方、神職３人がそれぞれご神体を抱えて大神輿が安置されている御旅所まで歩いてお運びする。

２５P上：やんさんま祭りの名で知られる、射水市加茂神社の加茂祭。フサフサのご神体が境内にある御旅所まで渡御する。
２５P下：井波よいやさ祭りの宵祭。神職に抱えられてご神体が御旅所まで運ばれる。

【コラム】金剛峯寺に奉納された唐櫃

富山の職人がかかわって製作した高野山・金剛峯寺に奉納する唐櫃が、２０１９年４月１２日～１４日の三日間、高岡市立博物館に展示された。

唐櫃とは脚が４本ないし６本ついた蓋付きの箱で、貴重な物を収納する家具だが、お寺や神社の祭具でもあり、ご神体を納めて御旅所へ渡御する時に使用されたりもする。

高岡御車山の宵祭りの日に二番町が神迎えする際や、通町の夏祭りに関野神社に預けてあるご神体が町内に里帰りする時にも唐櫃に納めて運ばれる。

今回制作された唐櫃は職人たちの技術を結集したもので、螺鈿細工や彫刻、金箔、漆、彩色、組子など贅を尽くしたものになっている。

中でも目を魅いたのは唐破風の屋根で、展示を観に行った時に棟梁がいらしたので聞いてみたが、たぶん唐破風の屋根が付いた唐櫃はこれだけだろうということだった。そして唐破風の屋根は檜皮葺きになっている。

檜皮葺きは日本古来の屋根葺きの手法で、檜の樹皮を少しずつズラしながら重ねて竹釘で固定する。富山で檜皮葺きの技法を使った屋根は、勝興寺の唐門と岩峅寺・雄山神社の本殿の屋根ぐらいだと思われる。

◯獅子舞王国・富山の獅子舞百珍

・多種多彩な富山の獅子舞

富山県の呉西に生まれ育って獅子舞と言えば大きな胴幕にたくさんの人が入る百足（むかで）獅子に慣れ親しんできた身に、２０１２年に初めて見た沖縄の獅子舞は新鮮だった。沖縄でも獅子舞は悪霊を祓い、弥勒世（ミルクユー・豊年の世の中）を招来し、五穀豊穣や地域の繁栄をもたらすとされている。

胴体は着ぐるみ風で、前脚と後脚に２人が入る。富山にも飛騨の方から伝わったという二人立ちの金蔵獅子があるが、こちらは小さな胴幕を被る感じだ。また沖縄の獅子の胴は芭蕉や化学繊維の糸で作られ動物の毛のようにフサフサしており、まさに生きた動物という感じがする。変わった獅子だな～と思ったが、冷静に考えると百足獅子の方が変わっている。獅子なのに足がたくさんあるのだから。

３１P上：呉西（県西部）に多い百足獅子。胴幕の中に何人も入り百足（むかで）のように足がでている。写真は高岡市福岡町２区（裏の宮）の獅子舞。
３１P下：着ぐるみのような沖縄の獅子。
３２P：見た目は本土の獅子と異なるが、健康祈願、学力向上を願って獅子に子供の頭を噛んでもらう風習は同じだ。
３３P上：飛騨の方から伝播したと思われる二人立ちの金蔵獅子。東猪谷の獅子舞は雄雌の２頭型。
３３P下：獅子頭に熊の毛皮を貼付けた熊獅子も、県内にいくつかある。写真は砺波市頼成の熊獅子。

富山にも獅子頭に熊の毛皮を貼付けた熊獅子というのがいくつかある。知人の住む集落にも熊獅子があり、「獅子なのに熊の毛」って変だと思わなかったか尋ねたところ、ずっと見てきているのでこれが普通だと思ってきたという。見慣れるというのは、そういうことなのだろう。

入善や黒部といった下新川方面の獅子舞は、一人立ちや二人立ちの獅子だ。百足獅子が多い呉西からすると、これだけでも新鮮だが、何より衝撃的だったのは天狗の数。多い演目だと大天狗８人、小天狗８人が登場する。獅子舞と言うより天狗舞だ。また天狗の装束も氷見のような煌びやかなものではなく、天狗の面をつけ頭は豆絞りの手ぬぐいを被る。赤く太いタスキをかけて背中で結ぶ簡素で素朴な恰好だ。

氷見や新湊、砺波の方の獅子頭には神職より授けられた神の御霊である紙垂が付けられるが、下新川の獅子頭に紙垂が付いているのは見た記憶がない。獅子舞の間に女性たちの踊りや歌が入るのも特徴で、演芸的な要素の強い獅子舞のように感じる。

３５P上：入善町クヌギ山の獅子は、二人立ちの下新川獅子。

３５P下：入善町元新屋の獅子は、一人立ちの下新川獅子。

３６P：頭に豆絞りを被り赤いタスキをつけた宇奈月町下立の天狗。天狗が大勢登場するのが下新川獅子の特徴でもある。

３７P上：天狗が４人揃って前転する下立の獅子舞。獅子舞というより天狗舞だ。

３７P下：獅子舞と獅子舞の間に、女性の舞踊や歌が入るのも下新川獅子の特徴だろう。

and more...